

安心して魚がすめる豊かな海に

3年 梅木柊真

僕の趣味は釣りだ。母の実家があるいちき串木野市羽島には、漁港に延びる磯と軟らかな砂地が広がる。磯にはアラカブやベラ、グレ、チヌなどがある。砂地にはエソやキス、マゴチなどが生息している。



この夏、久しぶりにさおを振ると、魚でも根掛かりでもない初めての感覚があった。釣れたのは、明らかに人間が捨てたごみだった。去年、持続可能な開発目標（SDGs）という世界的な取組を学校で学んだとき、その目標の一つに「海の豊かさを守ろう」があることを知った。人間が捨てたビニール袋をクラゲと間違えて食べたウミガメが死んだり、マイクロプラスチックと呼ばれるプラスチックが魚の体内に入って害を及ぼしたりしている海の現状がある。

釣りに行くと、それまで毎回2匹以上は魚が釣れていたが、1年半ぶりに来てみると、釣れたのはごみだけだった。安心して魚がすめる海にするために、僕はそのごみを持ち帰って捨てることにした。次に来たときには、魚のあたりを感じる海であってほしい。